

よしもと

目次

7	新型コロナウイルス 若布献上
7	宗像大社春季大祭 沖ノ島祭祀
6	神宝館だより・みこころ
5	宗像大社歌会詠草
4	御造管奉賛者御芳名

7 7 6 5 4 3 2

よしもと・COVID-19と名付けられた新型コロナウイルス。全世界で猛威を振るい、世界中で一九〇万人以上の人が発病し未だ増え続けている。四月七日の緊急事態宣言発令に伴い、当社では神宝館の休館、こまめな換気と消毒、除菌スプレ어의設置などの対策を行い、毎朝の日供祭に併せて疫病鎮静祈願祭を齎行している▼この緊急事態に、大なり小なり人間社会は右往左往している。しかし自然界に目を向けると、桜が咲き、四月の中頃には葉桜になっている。ツツジは蕾が膨らみ、花が咲き誇る準備が始まっている。人の営みに関係なく季節はいつも通り巡っている▼神道は古来より自然を畏怖し祈りを捧げてきた。疫病も恐ろしい自然の一つであり、各地に疫病鎮静の祈りが込められた祭典、神事が伝わっている。神職として日々の祈りを大切に一日でも早く事態が終息し、日常が戻る様に祈念したい。(目)

新型コロナウイルス

― 疫病と日本人

世界で猛威を奮う新型コロナウイルス。そもそも神社では疫病に関する祭りが沢山存在する。地元福岡では櫛田神社の博多祇園山笠が有名であるが、このような祭りを現在まで引き継いでいるのは、先人たちが決して忘れてはならないと考えた記憶の伝承でもある。

疫病の祭りを子細に見ていくと、日本人は疫病と対立するのではなく、疫病を鎮めることによって、自然との関わりをはじめ、何故こうなったのかを自問自答するなど、極めて謙虚な姿勢であることがわかる。

疫病には今も昔も社会の混乱、特に治安の乱れは細心の注意がなされている。先行きの見えない不安感が続くと、誰しも心身ともに疲れ果てて冷静さを欠く、日本人は世界の中でも比較的、社会性の高い民族とされるが、それでも乱れる時は、乱れてしまう。

近年、高度成長期にトイレットペーパーがなくなるという噂が流れ、人々が店に殺到し

て奪い合うなどのことがあった。この原因は疫病ではないが、個々の心配が高まって社会全体が不安になり、日本全体がパニック状態に陥ってしまった。今回もコロナを巡って、海外では殴り合いのような報道が複数なされていて、人間の弱い面が露呈している。

どんな時であつても平常心を保つことは難しいことではあるが、疫病の歴史を振り返ってみると、日本人は様々な祈りを捧げ、自ら自問自答することによって、心の安定を保ち続けている。

コロナに打ち勝つやウイルスとの戦争など、巷では過激な表現がなされているが、コロナを対立軸にするような考え方は、決して日本のなものではない。特効薬やワクチンの技術も待たれるところではあるが、現実を受け入れるためにも、過去の先人たちの疫病に対する謙虚な姿勢に学ぶべきではないだろうか。

宗像では隣国の経済活動が停止し、空も海も美しく輝き、本土から神の島「沖ノ島」が見える日も多くなっている。新緑の木々もいつもより青々としていて、野鳥が飛び交い自然が

生き生きしている。時間に追われる日々が続き、都会の人々は自然をじっくり見ることもなかったと思うが、公開された衛星写真からも、それぞれの地域や国々の自然の表情が今までと違うことだろう。

私たちは、経済という名のもとに大量生産大量消費を繰り返し、経済の豊かさが人の豊かさとしてきたが、今回のコロナにより改めてモノの豊かさ、心の豊かさについて、大きな反省をさせられるのではないか。あらゆる自然には神々が宿るといふ原点に立ち返り、コロナと自然を考えることも一考ではないか。

コロナの前線に立たれている医師や看護師、医療関係者には最大の敬意を払いながらも、私たち自身も何故このようになったのかを自問自答し、それぞれが本当に豊かな社会の姿を考えるべき時ではないだろうか。

科学や技術がいくら進歩しても人々の心理は、今も昔も変わることはない。特に非常時における心理は、歴史から学ぶことが多い。心の安定を保つためにも、疫病と日本人について、あらためて見詰め直しては如何か。

第五十八回 若布献上

初めての配送による献上

四月七日、「緊急事態宣言」の発出に伴い、宮内庁との協議の結果、配送による若布の献上となった。

四月十一日午前九時、辺津宮本殿にて若布献上奉告祭を斎行。葦津宮司、宗像大社海洋神事奉賛会会長・中村忠彦氏、宗像漁協副組合長・宮本昭則氏、神社総代・島田隆士氏、福岡運輸営業本部長・浦田昭蔵氏らが参列し、配送による献上が無事に行われるように祈念した。祭典後、献上若布は後述のご縁をもって配送奉仕を快諾して頂いた同社のトラックに積み込まれ出発した。

二日後の十三日午前十時トラックは乾門より参内し、献上申し上げた。

昭和三十八年から始まる「若布献上」であるが、神職による持参ができずに配送による献上は初めてである。過去、夜行列車や飛行

機を利用して上京していたが、若布が湿気に弱いこともあり、今回は冷凍輸送車を使用しでの配送となった。

若布献上の日程は、四月に献上することが定例であるが、二月下旬や三月の中旬から下旬に献上していた時期もある。毎年のように、海水温度が上昇し、寒期に成長する若布にとって大きな影響を及ぼしている。

海の環境は日々悪化の一途をたどり私たちの生活だけでなく、神事にも様々な影響を与えている。

福岡運輸

創業者である富永シヅ氏は、当時日本において前例のなかった冷凍車の開発に成功し、物流業界の常識を一転させた。

また、その長男である富永義昭氏は東京大学大学院時代、宮内庁侍従職の御用掛として勤めていた富山一郎氏に師事し、同氏とともに昭和天皇のご研究のお相手を務められ、皇太子時代の上皇陛下のハゼ科魚類の御研究助言者、相談相手でもあった。



宗像大社春季大祭

辺津宮春季大祭

四月一日(水) 二日(木)

辺津宮春季大祭は、花冷えの雨が降るなか、主基地方風俗舞が奉奏され、秋の五穀豊穰を祈る大祭が執り行われた。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、参列者席の拡幅、直会の中止などの対策を講じた。

翌二日は、高宮祭、第二宮・第三宮にて春季大祭を斎行。同時刻、福岡縣護国神社宮司田村豊彦氏をはじめ宗像市・福津市の遺族関係者参列のなか宗像護国神社にて春季大祭を斎行。

その後、辺津宮春季総社祭を斎行。玄海中学校女子生徒による浦安舞が奉納された。

沖津宮中津宮春季大祭

四月七日(火)

沖津宮中津宮春季大祭は毎年、旧暦の三月十五日に斎行している。今年も境内の桜が満開となった。春爛漫の気候の中、島内の厳島神社、御嶽神社、沖津宮遙拝所にそれぞれ神職が赴き祭典奉仕の後、中津宮にて大島の氏子参列のもと、氏子を代表して福岡三男氏が奉幣使をつとめ、巫女による浦安舞が奉奏され春季大祭を執り修めた。

玄界灘の沖合に位置する沖ノ島は、定められた日に渡島することが困難であることから、沖津宮の春秋の大祭は沖津宮遙拝所にて斎行されている。



浦安舞を奉仕した玄海中学生



主基地方風俗舞(4月1日奉奏)



桜が満開の中津宮



中津宮春季大祭

沖ノ島祭祀

18

疫病の蔓延と神輿・祭祀

國學院大學
神道文化学部教授 笹生衛

令和二年、新型コロナウイルス

の蔓延により人類は大きな危機を迎え、社会生活は根底から変化した。しかし、それは今回が初めてではない。人類は過去の歴史の中で、度々、疫病の蔓延を経験し、多くの犠牲者を出してきた。

これは古代の日本においても同様であった。天平七年(七三五)九州の大宰府管内から広まった瘡瘡(天然痘)は、天平九年にかけて列島内に蔓延し、当時の政権中枢にいた左大臣の藤原武智麻呂をはじめ多くの人々の命を奪ったことは著名である。

都市での疫病の蔓延という、令和の現在に近い状況は、平安時代の平安京でも起こっていた。平安

時代の歴史書『日本紀略』によると、正暦四・五年(九九三・九九四)、平安京で疫病が流行した。

正暦四年の五・六月は咳疫がはやり、七・八月には「疱瘡の患」があったという。咳疫はインフルエンザに当たるだろう。正暦五年三月になると、疫病に対処するため大赦や賑恤が行われた。賑恤とは、老人や困窮者などへ食料・物資を、朝廷(政府)が支給する救済策である。四・五月には疫病を鎮めるため、大赦と諸社への奉幣が度々行なわれた。また、「左

京三条油小路の井戸の水を飲む人は疾病を免れる」との噂が流れ京中の人々は殺到し、一方で妖言のため公卿から庶民までが門戸を閉じ家に籠ったという。現代と同様、社会不安が平安京内には広がり、混乱状態となっていたのである。

このような状況の正暦五年六月二十七日、都の北、船岡山で御霊会が行われた。目に見えない存在により多くの人々の命が次々に奪われていく。その様子を目の当たりにした当時の人々は、疫病の原因を「疫神」の働きと考え、これを鎮めるため、御霊会を行った。

神輿を作り「都人士女」(平安京の都市民)は楽人を招き音楽を奏し、多数の捧げものを持ち寄り供えて疫神を祀った。そして疫神は神輿で難波の海まで送られた。

この御霊会は朝廷が行ったのではなく、平安京の都市民・民衆により実施されたことに大きな意味があった。ここが一つの画期となり、不特定多数の人々が自由に参加し観覧する民衆の「祭祀」が成立したのである。この後、神が移動するための「神輿」、これに神を楽しませる音楽「神楽」が伴

う「神幸祭」の形が整えられ、現代に伝わる祇園御霊会(祇園祭)など都ぶりの祭りへとつながっていく。疫病の蔓延は、社会を変化させるとともに、新たな祭りの形を作っていたのである。



祇園御霊会の神輿と神楽・獅子『年中行事絵巻』(旧岡田本)(國學院大學博物館蔵)

神宝館だより 37

八万点ノ国宝収蔵

鏡―内行八花文鏡―

内行花文鏡は、中心に向かって内側に膨らむ円弧を連ねて主要の文様とした鏡。方格規矩鏡と同じく中国後漢時代(二五〇―三〇〇年)の鏡で、中国では連弧文鏡と呼ばれる。

本品は、後漢時代の鏡を模した仿製鏡(国産鏡)で四〜五世紀のものともみられる。中央の半球状の突起(鈕)の周りには、内行花文鏡の特徴である葉形の文様四個(四葉鈕座)が表され、メインの文様である八個の円弧(八花文)の間には、紐を結ったような文様(結紐文)を添えている。八個の円弧の外側には、松葉を束ねたような文様の間に小さな丸い突起を入れた文様(雲雷文)がめぐっている。

本品と後漢時代の内行花文鏡を比べると、一部に文様の改変がみられるが、後漢鏡例で一般的にみられる四葉鈕座と八花文を表現しているため、本鏡は比較的忠実に模倣したこ

とがわかる。幾何学模様の構成のバランス、鑄上がりなど、極めて優れており、前回紹介した鳥文縁方格規矩鏡と並び、本鏡は古墳時代前期の仿製鏡の中で最上級とされている。

わが国では、古墳時代前期前半(三世紀後半)に、弥生時代の青銅器生産と異なる新たな知識と技術によって国産鏡が創出され、その当初から本品のような直径二五cm以上の大型の鏡がまとまって製作された。その分布は近畿周辺に集中しており注目されている。(福)



国宝 内行八花文鏡 (19号遺跡出土、径24.8cm)

みこころ

春は出会いと別れの季節です。先月、後輩の巫

女二名と事務員一名が退職し、新たに巫女三名と事務員一名が入社しました。私は入社して四年目となり、上席としての責任を感じる場面が多くなってきました▼私が先輩方から学んだ神社の知識、巫女としての立ち振る舞い、社会人としての常識やマナーなどを後輩へ継承していけるよう努めていこうと思います▼「人の振りみてわが振り直せ」後輩を指導していくにあたり、まず自分自身を見つめなおし指導していきたいと思えます▼左の言葉は宗像大社巫女が常に意識している合言葉です。これらが自然にできるように先輩後輩ともに成長していきたいと思えます。(右)

T	常に
A	アンテナを張り
I	私は
S	所作に
H	品格と
A	愛を持って行動します

第705回

宗像大社歌会詠草

■大西晶子選

■毎月25日メチ

電気よしガスに鍵よし声に出し春の陽をあびに小路をあゝるく

池浦千鶴子

家を出るときには指差呼称で行動を確認する几帳面な作者。三句までの(し)の重なりでリズムが良い。四句は(春の陽浴びに)。

スコ(スコップ)使うトップ頼もし時の間にすみれ百余を植えしと笑まう 山本 静子
作者も一員である園芸グループのリーダーだろう、「すみれ百余」の具体的な数が効いている。

アフガンの大河はなにを映してる中村哲ではないのどもはや

山崎 公俊

中村哲氏への挽歌。大河は朝倉の山田堰をモデルにした堰を作ったクナール河か、「もはや」に感情がこもる。

ささくれの小指にかかるセーターは君の手編のハニートラップ

早川 祥三

贈りもののセーターにささくれが引っ掛かったことからハニートラップを連想した作者。捻った表現は照れの表れか。

奴山より宗像大社へいたる道世界遺産の道と想ひぬ

佐々木和彦

古墳群のある奴山から宗像大社へは幾通りかあるが古代の人も歩いた世界遺産の道と言えるだろう。

テニス好きメルボルンにてワールドの有名選手ゲーム観戦

秋吉 嘉範

初句切れ。旅の大切な思い出。初句(〜が好き)三句以下(〜世界級有名選手のゲームを観たり)としては。

公園の花壇の水仙茎毎に十個の花つけ冬を謳歌す

萩原 勉

冬の公園で、よく咲く水仙に作者は元気づけられたのだ。結句謳歌するは水仙には派手すぎるので(〜冬日を浴びる)〜くらいに。

地にボタンかけるごとく川土手にたんぽぽが咲く春の確かさ

吉崎美沙子

春の代表のようなたんぽぽの花を鉤に見立てた作者。鉤はかけるではなく(〜付ける)くらいに、開放的な方が春らしい。

夕闇の海に三日月の船浮かび一番星を乗せてどこ行く

本田エリナ

夕空の金と銀のメルヘン。童謡の「月の砂漠」や「歌を忘れたカナリヤ」を連想した。

◆選者詠

熟れ麦のはたけに咲ける矢車菊おもふは愉しそのふかき青

あつらへの母の上着を着て気づくわが撫で肩にびたり合ふこと

第676回 俳句

春さざす湖面の風のおもつまま

早川 祥三

御造宮奉賛者御芳名

(令和二年三月
(順不同・敬称略))

宗像市	嶋倉 剛	広島市	上田 雅典
宗像市	岩見 貴史	福岡市	大島なぎさ
五、〇〇〇円		福岡市	南 敏郎
小城市	大坪 桂子	八千代市	世野 雅緒
北九州市	澁江 有恒	三、〇〇〇円	
岐阜市	浅野喜美代	大阪市	福地 昭義
知多市	中嶋 祐輝	二、〇〇〇円	
対馬市	江口 大樹	福岡市	讚井 隆史

お知らせ

五月の祭典は巻末のまつりごよみに記載の通り斎行します。尚、各祭典の参列につきましては社会情勢並びに皆様の御事情に合わせて御判断くださいますようお願い申し上げます。新型コロナウイルス感染拡大防止の為、何卒御理解の程よろしく願います。

5月まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
5日	五月・浜宮祭 浜宮祭 於：宗像市神湊 五月祭 於：宗像市江口	午前10時30分 浜宮 午前11時 五月宮
15日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時

編集後記

三月に里帰りをした際、児玉神社例祭に参列した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から参列者の規模を縮小し斎行された▼児玉神社の御祭神・児玉源太郎は、日清戦争後、コレラや伝染病流行する中国大陸よりの二十三人の帰国兵士の検疫に医師の後藤新平を抜擢した。後藤は広島に大規模な検疫所を開設し陣頭指揮をとり、三カ月で二十三人の検疫を成し遂げた。当時、陸軍検疫部長であった児玉は、その働きから台湾総督となると後藤を民政長官に抜擢し、台湾での経済改革とインフラ建設を進めたのである▼現在、国を挙げて、国民の生活を守るための様々な要請が発令されている。児玉と後藤は、国の非常事態に功をなした。その活躍に思いを馳せながら、冷静に状況を見つめ、この困難に立ち向かっていかなければならない。(黒)